

-----, *British Drama 1533-1642: A Catalogue* vol. V: 1603-1608, Oxford: Oxford University Press, 2015.

カンター、ノーマン F. 『黒死病 疫病の社会史』久保儀明・植崎靖人訳、青土社、2009 年。
 蔵持不三也。『ペストの文化史 ヨーロッパの民衆文化と疫病』朝日選書、1995 年。
 ケリー、ジョン。『黒死病 ペストの中世史』野中邦子訳、中央公論新社、2008 年。
 ベルクルド、クラウス。『ヨーロッパの黒死病 大ペストと中世ヨーロッパの終焉』
 宮原啓子・渡邊芳子訳、国文社、1997 年。

- i 資料 C には “According to the Report made by the Parifh Clerkes of the laid Parifhes.” とある。
- ii “[...] The Bill were notoriously unreliable, not least because they only recorded the births and deaths of members of the Church of England, not usually recognizing the Catholic and Dissenters.” (Defoe 282)
- iii Wiggins, *British Drama* vol. IV, 372.
- iv Wiggins, *British Drama* vol. V, 16.
- v 蔵持不三也 『ペストの文化史』(226) においても、1602 年 12 月のペスト禍に言及する。
- vi 資料 A は刑務所の死者 6 名、伝染病病院の死者 4 名と記すが、2 週間後に発行された資料 B はそれぞれ 7 名と記載する。
- vii 資料 F の文字はインクが擦れて読み難しく、30533 または 30538 とも読める。
- viii フィリップ・アリエスの言う「餓いならされた死」「己の死」はペスト禍に於いても奪われている。
- ix ベルクドルト 14.
- x 資料 H は “were” と記す。
- xi ペスト流行時のユダヤ人迫害については、ベルクドルト 『ヨーロッパの黒死病』(183-224)、ケリー 『黒死病』(303-340)、カンター 『黒死病』(163-183) を参照。

較して一桁多い。

・死亡週報は死亡年報の役割を兼ねており、女王・国王崩御の年については必ず記載する（1603年発行の資料A・Bは1625年についての記述は無い）。

・ほぼ全ての死亡週報が埋葬者数の記載について“Died”ではなく“Buried”と記す。これはイギリス国教会の信者を対象に教会が死亡確認と墓地埋葬を許可した件数を意味すると考えられ、他にローマカトリックなど非国教徒の死者が存在したことを考慮する必要がある。ペスト流行時に濡れ衣を着せられ焼死などの虐殺迫害を強いられたユダヤ人は週報の記す数に含まれていない^{xi}。

以上、死亡週報に基づく考察より、テムズ川周辺で繁栄した演劇文化の背景には、ペストを理由とする暗い影が恒常的に存在していたと確認できるだろう。闇が日常を覆うからこそ、束の間であれ演劇のような煌びやかな世界が必要とされるのだ。

参考文献

- Anon. *The daunce and song of death*. London : J. Awdely, 1569. STC (2nd ed.) / 6222
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage* vol.4, Oxford: Clarendon Press, 1945.
- Defoe, Daniel. *A Journal of the Plague Year*, London: Penguin Classics, 2003.
- Dugdale, Sir William. *Monastici Anglicani. additamenta quaedam in volumen primum, ac volumen secundum, jam pridem edita: necnon fundationes, sive dotationes diversarum ecclesiarum cathedralium ac collegiatarum continens; / ex archivis regiis, ipsis autographis, ac diversis codicibus manuscriptis decerpta, et hoc congesta per Will. Dugdale Warwicensem Norroy Regem Armorum. Volumen tertium et ultimim*: Londini : Prostant apud Robertum Scott bibliopolam, 1683. Wing (2nd ed.), / D2486C
- God's judgments shewn unto mankind. A true and sorrowful relation of the sufferings of the inhabitants of the city of Marseilles in France, now under the dreadful calamity of the plague, pestilence and fevers, with the manner of its infecting them by vomiting, pains in the head, or purple boils under their arm pits, the number of the dead being above fifty thousand. And lastly the cause of it, and from whence it came, by a strict order from the Regent to the College of Physicians at Capentras. Tune of, Aim not too high. / Written by Tho. Gent*. London : s.n., 1721. Tract Supplement / A1:1[338]
- Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue* vol. IV: 1598-1602, Oxford: Oxford University Press, 2014.

Oct. 17	3219	2665 [手書き]
Oct. 24	1806	1421 [手書き]
Oct. 31	1388	1031 [手書き]
	[…]	
Dec.19	0525	281 [手書き]
Buried this Week of all Difeafes,		7946
Of the Plague		6102
Increased in the Burials this Week		1928
Parishes clear of the Plague		17
Parishes Infected		113
From Aug.22. to August29. 1665		[手書き]

さらに資料 H の枠外には、1665 年 12 月 26 日から 1666 年 10 月 30 日まで埋葬者数とペスト感染者数を手書きで記録し続けた跡が確認できる。1636 年以降、死亡週報の数字には統一性が確認できる理由として、資料 H のように、すでに印刷出版された死亡週報の空欄に少しずつ書き込みを残し、後の印刷出版へ向けて情報を蓄えていたことがわかるだろう。書き込みをした人物は残念ながら特定できない。

結.

死亡週報 8 点より、以下のことがわかる。

- ・ 8 点の死亡週報において 1603 年に関する数字は資料間で異なるが、1636 年には資料 4 点の数字が一致する。このことから、度重なる疫病流行の経験は人口統計に関する体制を徐々に整えたものと推察される。
- ・ 12 月または 1 月を疫病発生時とし、夏場の埋葬者数が年間最多となるが、11 月になっても事態が収束せず、12 月末まで埋葬者数を記録する死亡週報が殆どである。年中ペスト禍は続いていた。
- ・ 8 点の資料のうち 1603 年以降については the old London Wall の内側にある The Citte of London と 97 の自由区、外側にある教区を区別して記載している。先に市壁内の埋葬者数より言及を始め、途中で被害が拡大すると、調査対象区域を市壁外の教区へと広げている。その逆の例は無い。また、8 点の死亡週報を見る限りでは、the old London Wall 内の埋葬者数は市壁外の教区と比

1 - 5. 1646-1648 年

資料 F のみがこの期間の埋葬者数とペスト感染者数を記し、週毎の記録は無い。少数であるが、常にペスト感染者が毎年存在したことを記している。

1646 Buried (空白) | Of the Plague 2436

1647 Buried 16452 | Of the Plague 5285

1648 Buried 11509 | Of the Plague, 693

1 - 6. 1665 年

デフォーが『ペスト』において言及するのが 1665 年である。1665 年について記すのは資料 F・H の 2 点のみだ。

資料 F は “Buried in London and the Liberties of all difeases the number followeth,” とあり、4 月 25 日 (埋葬者 398 名うちペスト感染者 2 名 / 週) から 8 月 14 日までの記録を示す。7 月 4 日以降の週間埋葬者数は 4 桁となり、8 月第一週の埋葬者数は 3014 名うちペスト感染者 2010 名、第二週になると埋葬者数 4030 名うちペスト感染者 2817 名と増える。数字は資料 H と一致する。

資料 H で 8 月 15 日以降について確認すると、9 月第三週の時点で埋葬者数が 8000 人を超えるほどに増え続けている。また “Continued down to this present day, August 29. 1665” とあり、この死亡週報が 1665 年 8 月 29 日に印刷されたものであると判る。印刷出版後の 9 月 9 日から 12 月 25 日までの記録は、[手書き] の文字で死亡週報に直接書き加えられている (下図: 資料 H 一部拡大)。

	total.	Pl.
Aug. 15	5319	3880
Aug. 22	5568	4237
Aug. 29	7496	6102
Sept. 5	8252	6978 [手書き]
Sept. 12	7690	6544 [手書き]
Sept. 19	8297	7165 [手書き]
Sept. 26	6460	5532 [手書き]
Oct. 3	5720	4929 [手書き]
Oct. 10	5068	4327 [手書き]



added | to the City Parishes, | S. Marg. Westminster. | Lambeth. | S. Mary Newington. | Redriffe Parish. | S. Mary Ilhington. | Stepten Parish. | Hackney Parish.”と市壁外の7教区を加える。

また、資料E・F・G・Hの1636年に関する記録の数字は一致する。ここで取り扱う死亡週報はわずか8点であるが、1636年の記録になって4点のデータが一致する。6と9の反転という植字ミスは一か所確認できるが、これらデータの一致は、過去に1592年、1603年、1625年と大きなペスト禍を経験し、1636年には埋葬者数に関する情報管理体制が整い安定し始めた結果であろうと推察される。

資料4点の数字を見ると、1636年の初冬には収束しかけたペスト禍が再び勢いを取り戻している。最多時は、9月最終週で埋葬者数1403名うちペスト感染者928名、10月1日からの一週間では埋葬者数1405名うちペスト感染者922名と記録されるが、10月27日からの一週間で埋葬者900名うちペスト感染者458名となり、一度鎮静化するかのようであった。ところが翌週（11月第一週）には埋葬者1300名うちペスト感染者838名へと再び増えている。11月10日の週でも埋葬者数1104名うちペスト715名とあり、気温が下がっても疫病の被害は続いている。

さらに、資料F・Hによると1636年12月最終週は埋葬者数383名うちペスト感染者125名とあり、冬季まで長期に渡り疫病の影響は続いている。1636年全体を振りかえって年間埋葬者総数27415名うちペスト感染者12102名となる。資料F・Hは継続して1637年と1638年について共通の数字を記録しており、1637年は1636年末のペスト禍を引きずったまま1月5日からの一週間が年間最多となり、埋葬者数381名うちペスト感染者126名である。この年は夏を過ぎても埋葬者数が7月6日の362名を上回ること無く、10月19日の埋葬者174名うちペスト13名で記録は終わっている。一年を通して埋葬者総数は14270名うちペスト感染者3603名。さらに1638年については月毎、あるいは週毎のデータが無く、資料F・Hともに“Buried in London & | the Liberties this | year of all Diseases, 1662 | Of the Plague 508.”と記すに留まる。1637年と1638年におけるペスト禍は穏やかだが1636年以降長期に及ぶものであり、市民が疫病から完全に解放されることは無かったものと理解できるだろう。

スト教的伝統においてのみ発生した解釈ではなく、古代より疫病や疾病に対する人間の無力や無気力が根本にあると指摘されている^{ix}。また「神罰」を表現するものとして、16・17世紀の印刷物において木版画や飾り文字の流用は頻繁に見受けられるが、資料E・Fの中央に位置する木版画も酷似する。資料Eの挿絵はよく見かけるものだが、約30年後に印刷される資料Fの挿絵はさらに趣向を凝らしている。鉛矢と砂時計を掲げた死（死神）が両手を挙げて地上を支配し、周囲に祈祷を捧げる喪服の女性、馬に乗り遠くへ逃げる者、遺体運搬荷車が描かれる点は共通するが、*The Fearefull Summer* の例と同様、資料Fの挿絵は天上の雲間より天使が地上へと鉛の矢を放つ。



資料 E（一部拡大）



資料 F（一部拡大）

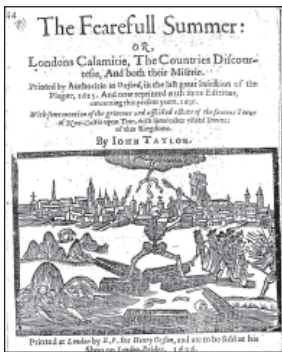
資料の数字を見てみよう。資料Eは“Buried in London & the Liberties, of all difeafes, the number as followeth”とし、4月7日から10月20日までを記すが、4月21日から壁外の7教区（Westminster, Lambeth, Newington, Redriffe, Ilhington, Stepney, Hackney）を統計に加えている。1625年の例で市壁外の統計を始めたのが7月であったことと比較すると、この年は例年より早く疫病被害が広域に及んだとみられる。9月1日の週で埋葬者総数1011名うちペスト638名、最多時が10月6日で埋葬者総数1405名うちペスト925名となる。

資料D（1636年出版）は1636年4月7日から1637年12月末までの統計を記載し、資料Eと同様に4月21日時点で“Here is added | onto the rest, | S. Marg. Westm. | Lambeth. | S. Mary Newin. | Redriffe Parilh. | S. Mary Ilhingt. | Stepney Parilh. | Hackney Parilh”と市壁外の教区を加える。しかし、インクが擦れて数字は解読不可能だ。資料E・Hも1636年4月7日からの二週間を他の週と区別して、“Buried in London & the Liberties, of all difeafes, the number as followeth.”と記した後、4月21以降については“This weeke was[were]^x

いずれの死亡週報も英国王ジェームズ一世が崩御する 1625 年について、約 10 カ月間の埋葬者総数を 5 万人超とし、被害の甚大さを物語る。

1 - 4. 1636 年

次に 1636 年に関する資料を見てみよう。この年出版された John Taylor, *The Fearefull Summer* (STC (2nd ed.) / 23756.) のタイトルページは、1625 年と 1636 年のペスト禍に言及する。



The fearefull summer: or, Londons calamitie, the countries discourtesie, and both their miserie Printed by authoritie in Oxford, in the last great infection of the plague, 1625. And now reprinted with some editions [sic], concerning this present yeere, 1636. With some mention of the grievous and afflicted estate of the famous towne of New-Castle upon Tine, with some other visited townes of this kingdome. By John Taylor.

先に紹介した *A rod for run-awayes* (1625) とほぼ同じ木版画であるが、ここでは挿絵より文字が消えている。木版画中央を見ると、雲の隙間から出た手からは稲妻のような筋が三本放たれ、棺や骸骨の散乱する地上では死（死神）が鉛の矢を手に暴れている。疫病発生を罪深い人間に対する神罰だと解釈していたことは、資料 A・B も冒頭で述べている。

And now in this present visitation which it pleafeth God to strike vs | with,
there hath died from the 17.of December 1602. to the 14. of July | 1603. the
whole number in London and the liberties, 4314. Whereof of | the plague,
3310. The reft are fet downe as they have followed weekly.

(資料 A・資料 B)

「ペスト＝神罰」という考えに基づき、鞭打ちなどの苦行に励むことで神の許しを請い願う集団「ディシプリーニ」が発生したとされるが、もとはキリ

out”、倒れた母子が“Wee Dye”と科白を言う。疫病と死の氾濫時に避病院に感染者を隔離したところで、先述の治療法では医療従事者と臨終を看取る聖職者への感染被害が拡大するのみとなり、最後には遺体運搬荷車^{デット・カート}も街から姿を消す。すると、必要に迫られた近親者は家族の遺体を自ら集団墓地の墓穴へ投げ込まなければならず、人が死を迎えるための精神的・物質的準備の猶予や、墓所・墓碑の個人化が奪われるという事態が発生してしまうのだ^{viii}。

1625年は英国王ジェームズ一世崩御の年である。死亡週報の数字を見てみよう。資料Cは1624年12月30日から翌年1625年12月末日までの1年間、6教区（Westminster、Lambeth、Newington、Stepny、Islington、Hackney）の埋葬者総数を8736名、うちペスト感染者6896名とする。これにロンドンと97自由区を合わせると埋葬者総数63002名、うちペスト感染者41313名と記していることより、市壁外の6教区に比べて市壁内のペスト感染死亡者数が多いことになる。

資料Dは“Anno 1625 buried of the Plague as followeth.”として、ペスト感染者に限定した埋葬件数を1625年7月2日（埋葬者69名/週）から12月1日（埋葬者15名/週）まで記録する。8月18日から一週間の埋葬者総数4463名が最多となり、9月1日で3344名、10月1日で538名、11月3日で89名へと減少する。

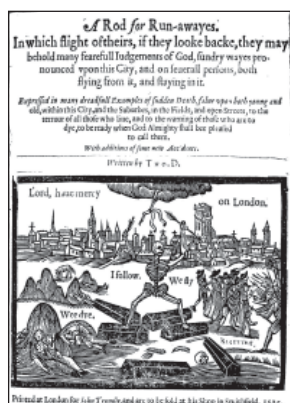
資料E・F・Hは1625年3月17日（埋葬者262名うちペスト感染者4名/週）から12月末日（埋葬者157名うちペスト感染者1名/週）までを記録し、8月18日から一週間の埋葬者数5205名うちペスト感染者4463名が最多となる。年間埋葬者総数54082名、うちペスト感染者35428名である。資料E・F・Hの統計は、著者（印刷出版依頼主）と印刷所がそれぞれ異なるが、1602-1603年のデータと同様に数字が一致する。加えて資料Fのみ“Buried in London and the Liberties of all difeales, Anno 1625. the number here following.”と調査対象教区を明記する。

資料Gは3月17日（埋葬者108名うちペスト3名/週）から12月22日（埋葬者168名うちペスト74名/週）までを記録し、8月18日から一週間の埋葬者数5205名うち4463名を最多とする。約10カ月の記録について“The Total of all the Burials of the time above laid 58758. Whereof the Plague 35403.”とする。

閉鎖されている。ジェームズ一世が崩御する 1625 年についても後述するが、死亡年報も兼ねる死亡週報がイングランド統治者崩御の年を調査対象から外すことは無い。死亡週報は、地上における神の代理人とされた国王・女王の崩御を契機に国民に対する加護が薄れ、結果、疫病流行と死の氾濫が生じたと関連付けるかのようであり、統治者讃美に加担する印象を与えかねない。

1 - 3. 1624-1625 年

“1611-16. Plague was absent from London.” (Chambers 351)



チェインバーズの記述は実質 1610 年までとなっている。資料 A・B は 1603 年発行であるため、それ以降の記載は無い。1625 年における疫病関連の出来事として、デッカー (Thomas Dekker, 1572-1632) が *A rod for run-awayes* (STC (2nd ed.) / 6520.4 : 左図) を出版した。このタイトルページには「逃げ惑う人々が後ろを振り返ると恐ろしい神の裁きの光景が広がり、老いも若きも、都市も郊外も関係なく、平野や通りに人が積み重なるようにして倒れた」とある。

In which flight of theirs, if they looke backe, they may beheld many fearefull iudgements of God, sundry wayes pronounced vpon this city, and on seuerall persons, both flying from it, and staying in it. Expressed in many dreadfull examples of sudden death, falne vpon both young and old, within this city, and the suburbes, in the fields, and open streets, to the terrour of all those who liue, and to the warning of those who are to dye, to be ready when God almighty shall bee pleased to call them. : With additions of some new accidents. / Written by Tho. D..

この木版画では地上における「死の勝利」が描かれている。死神が「I follow」、逃亡する群衆が「We fly」、その受け入れを拒む隣国の兵が「Keep

By Drinke.

Take worme-wood, and harbe of grace, and steepe them all | night in a pint of beere, with a lemmon on fliced, and drink them | in the morning fasting.

By Food.

Take a Wal-nut kernel, a corne of falt, foure leaves of hearbe | of grace; cut all very fmall, and put them in a blue figge, and | roaft it; and fast one hour after: but ufe it daily.

Aliter.

Take tofte of bread, and fspread it ouer with Treacle and but- | ter, and herbe of grace eaten with it is very good. (資料 D)

上掲のように効力を全く期待できない指南はこの時期のペスト関連資料に共通する特徴であり、やがては「特効薬を伝授する」と謳う広告を出し、訪問客へ法外な報酬を要求するビジネスへと発展していく。

資料 E・F・H の記載事項は共通して 1603 年 3 月 17 日から 12 月末日までの埋葬者総数とペスト感染者の内訳を示す。前半は“Buried in London and the Liberties, of all difeafes, Anno 1603. the number have following.”と壁内に限定するが、資料 D と同様 7 月 21 日以降について“The Out parishes this Weeke were joyned with the City.”と記し、壁外の埋葬者数を統計に含み始めたことは、先述のとおり、疫病感染区域が拡大した時期を意味する。約 10 カ月間の埋葬者総数は 38250 名うちペスト感染者 30583 名^{vii}。9 月 1 日からの一週間における被害が最多となり、埋葬者総数 3385 名うちペスト感染者 3034 名と記す。

資料 G は死亡週報が毎週木曜日に印刷発行されたことを記しており、タイトルに“the weekly bills of mortality printed every Thursday”と書かれる。資料 G は 1603 年 3 月 17 日から 12 月末日まで約 10 カ月の埋葬者総数 37294 名、うちペスト感染者 30561 名と記し、資料 E・F・H とはやや異なる。また、最多時についても 9 月 1 日からの一週間について埋葬者 3385 名うちペスト感染者「3035 名」と微差を示すのである。

ここで資料 8 点の共通点を挙げておこう。全てが 1603 年のペスト禍について記しており、資料 D・E・F・G・H は 3 月から記録を始める。エリザベス一世崩御は 1603 年 3 月 24 日であり、3 月 19 日にテムズ川周辺の劇場は



左図：Wenceslaus Hollar, *Plan of London before the fire. State 2, variant*. University of Toronto Wenceslaus Hollar Digital Collection. Web. 10th July. (一部拡大)
 ロンドン大火前のテムズ川周辺地図。ロンドン塔を中心に、北東にステプニー、南東にレドリフ、南西にランベスがみえる。

次に資料 D は珍しい形態をしており、死亡週報の役割としては左脇に 1603 年、右脇に 1625 年と 1636 年のペスト感染者埋葬件数を細長い帯状に僅かに記すのみだ。全体として 1603 年 3 月 31 日（埋葬者 6 名/週）から 12 月 22 日（埋葬者 79 名/週）までのロンドン市壁内における埋葬者数を記すが、7 月 21 日（埋葬者 917 名/週）以降については“the out Parishes jointed with the City and Liberties”として市壁外の統計を含み始める。被害が広域に及んだ時点で調査対象域を拡大しているのだ。記録は 9 月 1 日の 3035 名で最多となり、9 月 15 日 2818 名、11 月 3 日 594 名、12 月 1 日 102 名へと徐々に収束するが、やはり冬季になっても被害は続いた。さらに資料 D の興味深い特徴として、感染予防手段（Prefervative for Infection）と感染後の治療法（Prefervative when infected）、健康維持法（A speciall meanes to preferv health.）が全体を占めており、バラ香水や酢水で家屋や身体を洗浄・浄化し、薬草の香を焚くなどの民間療法を掲載している。瀉血や鼠蹊部に溜まる膿の排出については 8 点の資料には記されていない。

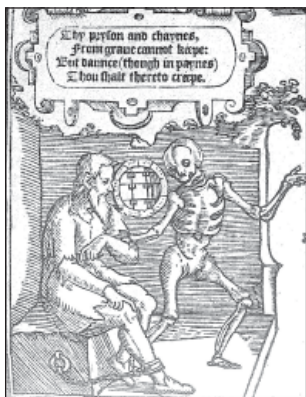
Prefervative for Infection

By Smell.

Take white Sponge foaked in herbe of grace water, which | water is thus made: Take e quart of Vinegar, halfe a pint of | Rofe-water, put in a hand-full of Rue, and halfe an handful of | worme-wood, and boile it to a pint: then take and dip the Spunge | in it when it is cold, and hold it to your nose when you go abroad: and this is a good Prefervative.

Aliter.

Take of the best Cedar wood, and grace a fell wooden boxe | full, and let the lid be full of holes, and smell to it.



屋内外を問わずあらゆる場所に人が伏し、疫病感染後まもなく亡くなったと詠う。死神は都市を破滅するとすぐさま隣国へ向かい、そこでは新たに恐怖に怯え逃げ惑う民からの悲鳴があがった。ペストの足は速いのだ。全ての感染者を避病院へと隔離して感染拡大を抑止するための空間的・時間的猶予は無かったと推測される。また左図は囚人について詠う「死の舞踏」(STC (2nd ed.) / 6222) から的一部拡大図であるが、牢屋に閉じ込められ鎖に繋がれる囚人も死神から逃れることはできず、たとえ苦しみ地を這おうとも墓へと招かれていったことが詠われている。

Thy pryson and chaynes,
From grave cannot keepe:
But daunce (though in paynes)
Thou shalt thereto creepe.

(Anon, *The daunce and song of death*, ll.4-7)

生者を襲う死神に善悪や美醜、老若や貧富、屋内外の区別など無い。生者が存在する限り、死は全ての者へ平等に手を差し伸べている。

続いて資料 C は、“The true report of all thofe | *that Died of all Diseases, in | the City of Westminster, Lambeth | Newington, Sauoy, Stepney, | Hackney and Iflington, in | the great vifitation, 23. yeeres fince, viz. in | Anno 1602. and | 1603.*” と調査区域を設定し、7教区の総埋葬者数を 4910 名、うちペスト感染者 4526 名とする。さらにロンドンと 97 自由区を加えた総死者数を 43411 名、うちペスト感染者 30754 名と記している。やはり、市壁外の周辺教区に比べて市壁内の都市部における死者数が一桁増えることとなる。

	out of the pefthouse	in Bridewell	pefthouse
July14-21			
July21-28	18		
July28-August4			19
August4-11			12
August11-18		7	21
August18-25		8	12
August25-September1		5	6
September1-8		17	5
September8-15		7	10
September15-22		19	10
September22-29		8	4
September29-October6		7(6)	7(4) ^{vi}
October6-13		9	4
October13-20		6	

9月上旬の埋葬者数が多いことに驚きはしない。注目すべきは資料A・Bのみが伝染病病院外、刑務所、伝染病病院というカテゴリーを設けたことである。伝染病病院外については7月第4週の18名のみを記し、病院（内）については記される死亡者数が少ない。これに関連して、当時の惨状を伝えるブロードシートより詩の一部を引用する。

Some in the streets, some near the Fountains lay,	通りや泉の傍で息絶える者
And drinking Water, wash'd their souls away;	水を飲み、魂を洗い清めて
No ural us'd, no decent Order there.	順番など無い
But unregarded lay in open Air.	屋外で看取られることもない

The very Sailors, gallant, stout and brave,	水夫、豪傑、勇者
In two Days Time were sent unto their Grave;	彼らは二日で墓へ送られた
Few do escape to suffer five Days Pain,	稀に5日間苦悶に耐えると
Which if they do, they may alive remain.	生を許されることもあった

(*God's judgments shewn unto mankind*, ll.88-91;97-100)

年 12 月 17 日の時点で始まっており、1603 年へ継続したものと考えられる^v。数字を見る限りでは 1592 年の例と同様、冬に疫病が発生し、8 月から 9 月にかけて一週間に 3000 人以上が埋葬されている。ペストは、クマネズミなどの齧歯類やペストノミの活動が活発になり、公衆衛生状態が悪化する夏場に猛威を振う。外気温が再び下がるにつれて収束の傾向にあったことは想像に易いが、資料 A・B の差異から 1603 年 10 月中旬の二週間でも約 2000 人が埋葬されたことになる。この数字がイギリス国教会に限られたものであると考えると、被害の甚大さを推察できる。

さらに資料 A・B は 1603 年について、The old London Wall に囲まれた the Cittie of London と 97 の自由区に関する週毎の埋葬者総数とペスト感染者数、伝染病病院内外の死者数、刑務所における死者数の内訳を記している。

	(total)	whereof the plague	in the our parishes	vwhereof the plague
July 14-21	867	646	319	271
July 21-28	1103	857	781	671
July 28-August 4	1700	1439	537	464
August 4-11	1655	1372	410	361
August 11-18	2486	2199	568	514
August 18-25	2343	2091	510	448
August 25-September 1	2798	2495	587	540
September 1-8	2583	2283	495	441
September 8-15	2676	2411	457	407
September 15-22	2080	1851	376	344
September 22-29	1666	1478	295	254
September 29-October 6	1525	1367	306	274
October 6-13	1109	962	203	184
October 13-20	647	546	119	109

Stepny parish、Newington-buts、Illington、Lambeth、Hackney、Redriffを合わせたテムズ川兩岸における各週の埋葬者数とペスト感染者数を以下のように示す。印刷物における植字は統一性を欠くが、以下にそのまま転記する。

〈資料 A・B 共通部分〉	Buried in all this weeke,	Whereof of the plague,
From the 14 of Iuly, to the 21. of the fame	1186	917
From the 21 of Iuly, to the 28. of the fame	1728	1396
From the 28 of Iuly, to the 4 of Auguft,	2256	1922
From the 4 of Auguft to the 11 of the fame	2077	1745
From the 11 of Auguft, to the 18 of the fame	3054	2713
From the 18 of Auguft, to the 25 of the fame	2853	2539
From the 25 of Auguft, to the 1. of the September,	3385	3035
From the 1 of September, to the 8 of the fame,	3078	2724
From the 8 of September, to the 15 of the fame,	3129	2818
From the 15 of Septemb. to the 22 of the fame	2456	2195
From the 22 of Septemb. to the 29 of the fame,	1961	1732
From the 29 of Septemb. to the 6. of October,	1831	1641
Buried in all, within London and the liberties, <u>fince the ficknes began,</u> 32353. whereof of the plague, 27710. (emphasis added)		

〈資料 B〉		
From the 6. of October, to the 13 of the fame	1312	1146
From the 13 of October, to the 20 of the fame,	766	645
Buried in all, within London and the liberties, <u>fince the ficknes began,</u> 35267. whereof of the plague, 29402.		

チェインバーズの報告には「1602年にペスト流行の証拠は無い」「1603年の疫病発生時は4月」とあるが、上記引用下線部“fince the ficknes began”について、資料 A・B は “And now in this prefont vifitation which it pleafeth God to ftrike vs | with, there hath died from the 17.of December 1602. to the 14. of July | 1603. the whole number in London and the liberties, 4314. Whereof of | the plague, 3310. The reft are fet downe as they have followed weekly.” と記した後、各期間の埋葬者数記録を始めていることから、1603年のペスト禍は遅くとも1602

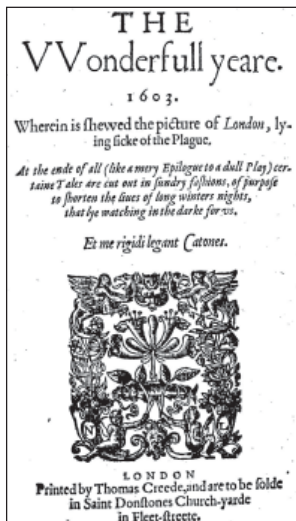
間のデータとして、この数字を掲載している。これら数字の誤差より、16世紀末頃のイギリス国教会信者に関する死亡埋葬者数の管理体制はまだ整っていないかとの推測される。デフォーが『ペスト』において言及する1665年になっても、市民は紙に印刷された数字よりもはるかに多くの死者数を想定していたようだ。1592年に関するデータを見る限りでは、「疫病は主に冬に発生し、死者数は夏に最も増え、ペスト禍は年末までほぼ一年間続いた」という解釈が可能となる。疫病は夏期のみ突然現れて消えたのではない。

1 - 2. 1602-1603年

“1601-2. There is no evidence of plague.”

“1603. Plague broke out during April. Precautions were already being taken on 18 April. Plays had been restrained during the illness of Elizabeth on 19 March and probably not resumed. [...] Stowe, *Annales*, 857, gives the total deaths in the City and liberties as 38,224, including 30,578 from plague.”
(Chambers 349-350)

この頃の出来事として、William Shakespeare, *Troilus and Cressida* の印刷所原本がロンドン書籍商組合 (The Stationers of London) へ持ち込まれ、検閲を受け、出版の許可を得て書籍商組合記録に登録されたのが1602年ⁱⁱⁱ、John Marston, *The Malcontent* の場合が1603年と推定されている^{iv}。ペスト関連印刷物としては1603年に Thomas Dekker, *The Wonderful yeare* (左図: STC (2nd ed.) / 6535.3) が出版された。



1603年以降、The old London Wallの内外を意識して区別する資料が現れている。資料A (調査対象期間: 1603年7月14日-10月6日) と資料B (調査対象期間: 1603年7月14日-10月20日) はThe old London Wallに囲まれたthe Cittie of Londonを含む97の自由区 (liberties) に加え Westminster, the Sauoy、

Death speaketh to the Child.	(死が子供へ話しかける)
Little faunte that wert but late borne,	生まれたばかりの幼子よ
Shape in this world to have no plasaunce,	この世の喜びをまだ知らぬ者
Ye must with other that gone herebeforne,	お前は皆と去らねばならぬ
Ne lad in hast by fatal ordinance,	運命に従い急ぐのだ
There may none age escape insoth therefro,	どんな齢も死を逃れられない
Let every might have this in remembrance,	皆このことを覚えておけ
Who longest liveth most shall suffer woe.	長く生きるほど苦しむのだと

The young Child maketh aunswer.	(子供が答える)
AA,a,a, woorde I cannot speake,	ああ、あ、あ、言葉を話せない
I am so younge I was borne yesterday,	昨日生まれたばかりなのに
Death is so hasty on me to be wreek,	死は早急に私を罰する
And lift no lenger to make no delay.	少しも猶予をくれない
I am but now borne, and now I go my way,	今から道を歩もうというのに
If me no more to tele shall be told,	聴かせる言葉がもう無いなら
The will of God no man withstondm ay,	神の御意志は止められない
As soon dyeth a young as an old.	老いも若きも皆すぐ死ぬのだ

(Sir William Dugdale, *Monastici Anglicani*, 368)

出生率の低下するペスト禍において幸いにも誕生し洗礼を受けた幼子をも、死は例外なく誘い連れ去るのだ。

初期の死亡週報が記すデータが曖昧であるという話へ戻るが、1592年と1593年について資料C・D・Fは言及しておらず、また資料A・B・E・Gの4点の記載内容には微差が認められる。まず、これらの調査対象期間は異なっており、資料A・Bは1年間、資料E(1636年)・G(1665年)は共通して3月17日から12月22までの約10カ月間のデータを記す。しかし、4点とも「年間埋葬者総数25886名うちペスト感染者15003名」という数字は不思議と一致するのである。さらに、印刷出版年が約30年空く資料E(1636年)と資料G(1665年)についても、最多時の「埋葬者1550名うちペスト感染者797名」という記載は一致するものの、該当する時期が一週間ずれているのだ。資料Eは8月4日からの一週間、資料Gは8月11日からの一週

における資料としての存在価値は、印刷所原本作成者の意図する情報やメッセージなど、何かしらのフィルターを通過した主観的印象を読み取ることにあると思われる。

では、実際の数字をみてみよう。資料 A（1603 年 10 月 6 日発行）と資料 B（1603 年 10 月 20 日発行）は酷似するものの各々の出版依頼主が異なり、資料 A はチェトル（Henry Chettle）の名で出されている。これが劇作と役者、印刷出版業を兼業したチェトル本人であるかは不明だ。資料 A・B は共通して “And in the laft great vifitation, from the 20. of December 1592. to the 23. of the fame month in the yéere 1593. died in all 25886. of the plague in and about London, 15003. And in the yéere before, 2000.” と記録し、ペスト発症時が夏ではないと記す。後に他の資料についても詳説するが、ペスト発生時は共通して 12 月や 1 月といった冬季である。

この時期の人口減少については資料 E が物語っている。資料 E は “An exact and true relation of the number of those that were buried in London and the Liberties of all diseases, from the 17. of March 1592. to 22 of December, 1593” と題し、この期間の被洗礼者（Baptized）が 5827 名であったのに対して、埋葬者数 25886 名うちペスト感染者 11503 名と記す。約 10 カ月間でイギリス国教会被洗礼者の約 5 倍の人口が埋葬されたことになる。埋葬者数の年齢層を記す死亡週報の例はまだ見ないが、そこには新生児も含まれるだろう。以下の詩はマルセイユにおけるペスト禍の惨状を詠ったブロードシートと、ジョン・リドゲイトが伝語から英訳した「死の舞踏」からの一部引用である。

Methinks I see a tender Mother die,	慈愛に満ちた母が死ぬと
And hear her pretty infants how they cry!	乳飲み子の泣声が聞こえる
Dear Mammy, do not die, and leave us here,	お母さん逝かないで
And then burst out in Rivers of salt Tears.	涙が川のように溢れ出る

Or else methinks I see the Children die,	幼子が亡くなると
And tender Mother weeping standing by,	優しい母は傍で泣いた
Expecting every Moment for to fall	全て塵となっておくれ
Into the Earth, which must receive us all.	大地は全て呑み込んでくれる

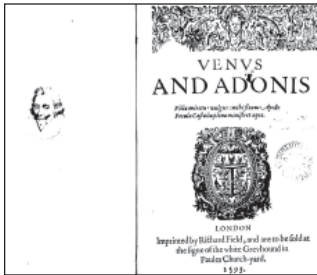
(*God's judgments shewn unto mankind*, ll.69-76)

London; as also, the number of those that then died, not onely on the plague, but of all diseases, Continued down to this present day, August 29. 1665. To which is likewise added, a necessary prayer for this present time, London: printed by Tho. Milbourn in Jewen-street, MDCLXV. [1665]. Wing (2nd ed.) / M2991B

以降、本稿は8点の死亡週報について年代毎に比較検証する際、これらを便宜上「資料」と呼ぶことにする。

1 - 1. 1592-1593 年

“1593. This was a year of continuous plague. The Privy Council warned the Lord Mayor on 21 Jan. that the increase of deaths after some weeks of diminution required care [...] . Plays were restrained on 28 Jan.[...] The statistics of deaths are puzzling.” (Chambers 348)



テムズ河周辺の劇場は疫病流行の影響を受け、閉鎖に追い込まれた。1592年以降、一時的とはいえ収入を無くしたシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) は周知のとおり *Venus and Adonis* (1593)、*The Rape of Lucrece* (1594) を第三代サウサンプトン伯、ヘンリー・リズリー (Henry Wriothesley, Third Earl of Southampton) へ献上している。1593年に出版された *Venus and Adonis* (STC (2nd ed.) / 22354) を見ると、飾り文字が美しいタイトルページの隣には、おそらくサウサンプトン伯爵と思われる肖像画が小さく添えられている。

この時期のペストによる被害程度を知る一つの術として、死亡週報の分析を始めてみよう。早速断わっておかなければならないのは、死亡週報の記すデータは完璧ではないということである。死亡週報はイギリス国教会 (Church of England) の信者に関する数字を表すものであり、カトリック信者や非国教徒、ユダヤ人は含まれていないⁱⁱ。特に16世紀後半から17世紀初期の死亡週報の示す数字には資料間でバラつきが確認でき、これらの今日

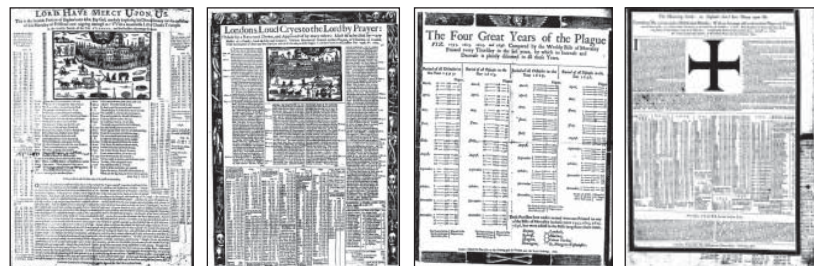
- relation of many visitations by the plague, in sundry other forraine countries,* London: printed by I.R[oberts]. for Iohn Trundle, and are to be sold at his shop in Barbican, neere Long lane end, [1603]. STC (2nd ed.) / 16743.3
- (C) Worshipful Company of Parish Clerks. *A generall or great bill for this yeere of the whole number of burials, which haue beene buried of all diseases, and also of the plague in the citie of Westminster; Lambeth, Newington, Stepney, Hackney and Islington: from Thursday the 30. of December, 1624. to Thursday the 22. of December, 1625. According to the report made by the parish clarkes of the said parishes,* London: printed by William Stansby, 1625. STC (2nd ed.) / 16741.7
- (D) Anon. *Lord haue mercy vpon vs A speciall remedy for the plague,* [London] : Printed [by R. Young and M. Flesher] for M. S[parke] Junior, [1636] . STC (2nd ed.) / 20875
- (E) Anon. *Lord have mercy upon us This is the humble petition of England unto Alm[ig]hty God, meekely imploring his divine bounty for the cessation of this mortality of pestilence now raining amongst us: vvith a lamentable list of deaths triumphs in the weekly burials of the city of London, and the parishes adjacent to the same. M.P.,* London: For Thomas Lambert at the signe of the Hors-shoo in Smithfield, [1636] . STC (2nd ed.) / 19251.3
- (F) Anon. *Londons loud cryes to the Lord by prayer: made by a reverend divine, and approved of by many others: most fit to be used by every master of a family, both in city and country. With an account of several modern plagues, or visitations in London, with the number of those that then dyed, as well of all diseases, as of the plague; continued down to this present day August, 8th. 1665,* London: printed for T. Mabb, for R. Burton, and R. Gilberson [sic], [1665] . Wing (CD-ROM, 1996) / L2938
- (G) Anon. *The Four great years of the plague, viz. 1593, 1603, 1625, and 1636 compared by the weekly bills of mortality printed every Thursday in the said years, by which its increase and decrease is plainly discerned in all those years,* London: Printed for Peter Cole ..., 1665. Wing / F1658
- (H) Anon. *The mourning-cross: or, England's Lord have mercy upon us Containing the certain causes of pestilential diseases; with an accompt of several modern plagues or visitation in times past, as well in other countries as in the city of*

査対象期間と埋葬者数は後から手書きで記すことになっている。手書きの紙をそのまま複数名に配布することは不可能であるため、この一葉が印刷所原本の役割を兼ねていたとすれば興味深い。これより本稿が用いる8点の死亡週報とそれらの書誌情報を示すが、ここでも Worshipful Company of Parish Clerks. の名が資料 B・C の印刷出版依頼主として登場している。

(A) 1603 年 (B)1603 年 (C)1625 年 (D) 1636 年



(E)1636 年 (F)1665 年 (G) 1665 年 (H)1665 年



- (A) Chettle, Henry. *A True bill of the whole number that hath died in the cittie of London, the city of Westminster, the city of Norwich, and diuers other places, since the time this last sicknes of the plague began in either of them, to this present month of October the sixth day, 1603 with a relation of many visitations by the plague, in sundry other forraine countries*, London: Printed by I.R. for Iohn Trundle, and are to be sold at his shop in Barbican, neere Long Lane end, [1603] . STC (2nd ed.) / 16743.2
- (B) Worshipful Company of Parish Clerks. *A true bill of the whole number that hath died in the cittie of London, the city of Westminster, the city of Norwich, and diuers other places, since the time this last sicknes of the plague began in either of them, to this present month of October the 20. day, 1603. With a*

continued 50, yeres with great violence. And in the yéere 1348. in | Paris in
Fraunce, there died a hundred thoufand people of the Plague.

In the yéere 1359, fo great a peftilence there was in Italy, that there | were
fcarce tenne left a thoufand. And in the yéere 1521, there died | in Rome a
hundred thoufand of the peftilence.

In the yéere 1576. and 77. in Millan, Padua, and Uenice, there | fell a
hundred thoufand in every City: and in Bohemia (beeing but a | fmall
kingdome) there died three hundred thoufand the fame time.

(本稿が紹介する死亡週報 A・B 共通部分より)

なぜ死亡週報が発行されたのかについて、当時、疫病感染を防ぐための様々
な指南書が巷に出回っていたものの、最も有効な手段は逸早くその場から逃
げることであった。1636年にトマス・テイラー (Thomas Taylor, 1576-1632)
の名前で印刷出版された一葉、*An answer to that question, : Hovv farre it is
lavvfull to flee in the time of the plagve* (STC (2nd ed.) / 22354) は、“May a man,
to hide himself from the Plague, forfake his place, his calling, and remove himfelfe
and his?” という問い掛けより本文を始め、逃げるという行為が合法であり必
要であることについて、聖書を引用し複数の根拠を示しながら対話形式で大
真面目に説いている。死亡週報が発行されるという事態そのものが、市民へ
注意を喚起する十分な役割を担っていたようだ。

また、死亡週報発行に至るまでのプロセスだが、各週の埋葬者数を教区

The image shows a page from a historical document, likely a record of burials or deaths during a plague. The page is titled "From the 12" and "17 20/20/20/20". It contains a table with multiple columns and rows of text. The columns are headed with names of parishes or locations, and the rows contain names and numbers. The text is written in an old script, possibly Latin or English from the 17th century. The table is organized into several sections, with some headings in bold or larger font. The overall appearance is that of a formal record or ledger.

役員 (parish clerk) が調べ、役員が教区役員
本部 (the Hall of the Company of Parish Clerk)
へと報告し、本部が取りまとめた数字を掲
載していた¹。時に市長 (Lord mayor) の要
請によって治安判事 (Justice of the Peace) が
再調査を命じることもあったとされてい
る。また、集めた情報を記載するためのフ
ォーマットが準備されていたようだ。1621
年のブロードシート (左図: STC (2nd ed.) /
16743.7) をみると、ここには調査の対象と
なる教区名が予め全て印刷されており、調

《資料紹介》

16-17世紀イングランドにおける
ペスト流行時の死亡週報について

國崎 倫

本資料紹介の目的は、16-17世紀イングランドにおけるペスト流行時に印刷された死亡週報（the weekly Bill of Mortality）を主に紹介し、分析することである。死亡週報についてはデフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）が1722年に出版した『ペスト』（*A Journal of the Plague Year*）のなかで1665年のデータに言及するが、論者が研究対象とするエリザベス朝・ジェームズ朝とはやや時差がある。そのため、ここでは考察対象を死亡週報が掲載する1592年から1665年までの内容に限定し、E. K. Chambers, ‘Appendix E: Plague Records’, *The Elizabethan Stage* vol.4 (346-351) を傍らに、埋葬者数に基づく疫病被害の程度と他の特徴を検証したい。なお、チェインバーズの記録が1616年までとなっていることから、本稿は他に複数の一次資料を提示しながら、それ以降の社会についても可能な限り実証的な考察を試みたい。これによって華やかな演劇文化や、無礼講の許された束の間の祝祭空間の対極には、疫病と死が恒常的に市民の生活に存在したことを示すことができると考えている。

1. 死亡週報の印刷出版システムの発展と疫病流行の被害程度

16世紀中頃より、疫病の発生と流行に伴い死者が増え始めると死亡週報を発行するという慣習が始まった。死亡週報とは各週の埋葬者総数とその内訳を示したブロードシートであり、多くの場合、冒頭において疫病発生は罪深い人間に対する神罰であると述べた後、疫病流行に対する意味解釈、聖書からの引用、疫病感染予防策や感染後の治療法などを同時に掲載している。また、ペスト発生はイングランドに起因するものではなく近隣諸国がもたらした悪疫であると主張するために、フランスやイタリア、ポホミアにおける疫病発生について年号と共に陳述する例が確認できる。

In the yeere 540, there began an uniuersall plague all ouer the world, | that